



# HOKKAIDO UNIVERSITY

|                  |                                                                                   |
|------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | 中国における農村構造格差の分析：地域類型比較による                                                         |
| Author(s)        | 黒河，功                                                                              |
| Citation         | 農業経営研究, 21, 159-166                                                               |
| Issue Date       | 1995-02                                                                           |
| Doc URL          | <a href="https://hdl.handle.net/2115/36505">https://hdl.handle.net/2115/36505</a> |
| Type             | departmental bulletin paper                                                       |
| File Information | 21_159-166.pdf                                                                    |



# 中国における農村構造格差の分析

－地域類型比較による－

黒河 功

1. はじめに
2. 農業構造の地域類型間比較
3. 農業構造の年次間比較
4. おわりに ー格差構造への認識ー

## 1. はじめに

かねてよりインフレの懸念があがっているにもかかわらず、中国の経済発展はまだまだ二けた台の経済成長が予想されている。主として沿海に位置する経済特区によるものであり、まさに、他に先行して成長を遂げて追隨するものを助け、結果として経済全体を底上げするというシナリオどおりに進展しているかに思われる。

しかしながら統計によっても、沿海の背後にある内陸部の経済成長は遅々として進展せず、その格差拡大はますます増幅しているといえる（引用・参考文献(1)、(2)）。また最近において改めて留意すべき側面として、食糧問題がある。食糧生産の動向は、84年に4億万トンの大台を達成したが、その後は低迷し、89年、90年に再び4億万トン台になっているが、飛躍的な増産の兆しはみえない。むしろ、政府予算に占める農業予算が相対的に減少していること、また農産物価格の低迷のために積極的な自己投資がなされないこと、あるいは内陸部から沿海の経済発展地域への盲流（近年では地方政府の許可をとって出稼ぎが可能となっているが）による農地の放棄などの原因によって、生産意欲も含めて食糧増産の潜在的可能性が失われているといえる。

中国においては、一人当たり食糧保有量が400kgが目標とされてきており、大豊作年の90年においてすら383kgであった。これは大豊作であっても年々それ以上の人口増加があるためであり、「温飽＝ぎりぎりの水準」は達成されたとはいえ、

「小康＝まずまず」の生活水準を安定的に維持していくためには、それを基礎づける食糧確保の側面において大きな不安定性をはらんでいるとみざるをえない。

このように中国における食糧確保における不安定性は、基本的にますます拡大する人口圧と飛躍的増産が期待できない現状の生産構造にあるが、一方では、生産の年次的変動と地域間変動を調整することが遅れているためとみられる。すなわち、年次間および地域間における過剰と不足を調整するための交通・輸送・貯蔵条件が未整備のためといえる。同時に、広大な国土は実にさまざまな地勢、風土など自然条件が異なるため、さまざまな投資戦略すなわち画一的ではない地域条件に即した施策が施されるべきであり、多様な食糧確保、増産対策、農村振興施策が考えられるべきである。

前回（21号）の「中国における貧困農村の地帯構造」において指摘したように、80年代後半における中国政府筋による貧困の定義はおよそ400元（人・年当たり）以下であった。それによると貧困地域はやはり少数民族地域、老革命根拠地域、辺境地域に集中しているとみられたが、本報告では丘陵地域、山村地域、平原地域、貧困地域、民族地域、牧業地域として取り纏められた統計によって、より多様な各農村構造を比較検討し、少なくともこのような地域類型ごとによる多様な道筋の農村振興対策が必要であることを主張したい。

## 2. 農業構造の地域類型間比較

統計では、本報告でとりあげる6つの地域類型の外に、老革命根拠地区、辺境地区、城市地区、黄淮海地区、黄土高原地区、長江中下流地区、沿海開放地区、商品食糧基地地区などの諸類型も掲げられているが、いくぶん煩雑になるのを避けるため表にみられる6類型を対象とした。

統計は「県単位」の数値をさらに類型ごとに集計したものであり、県数はそれぞれの類型について何百個というオーダーとなる。各類型にふくまれる県の所在は全国に渡るものであり、また同じ県が類型の定義に合致していればいくつかの類型に渡って含まれている。特定類型に集中して含まれる県を多くもつ省・自治区の名前をごく大ざっぱに挙げると、以下のようである。

丘陵地区：内蒙古自治区、山西省、黒竜江省、江西省、河南省、湖南省、広西壮族自治区、四川省、陝西省

山村地区：河北省、山西省、浙江省、福建省、江西省、山東省、湖南省、広東省、広西壮族自治区、四川省、貴州省、雲南省、西藏自治区、甘肅省、青海

平原地区：河北省，山西省，江蘇省，安徽省，山東省，河南省，陝西省，新疆ウイグル自治区

貧困地区(国家扶持)：広西壮族自治区，四川省，雲南省，陝西省，甘肅省

民族地区：内蒙古自治区，広西壮族自治区，四川省，貴州省，雲南省，西藏自治区，青海省，新疆ウイグル自治区

牧民地区：内蒙古自治区，陝西省，寧夏回族自治区，甘肅省，青海省，新疆ウイグル自治区，西藏自治区

アンダーラインはそれぞれの特定地区に県の数がとくに多く含まれている省あるいは自治区名を示している。以下、さしあたり88年のデータによって各指標についてみる。

#### (1) 郷村人口・耕地面積

農家一人平均経営耕地面積は全国平均で11aである（1988年）。山村地区ではそれを下回っているが、牧民地区を除くと概ね平均レベルであるとみられる。牧民地区は耕地面積も少ないが、それ以上に人口が相対的に少ないために一人当たり耕地面積は34aと大きなものとなっている。

#### (2) 機械化・灌漑・化学肥料

農業機械総動力は、平原地区において一人当たり及び単位耕地面積当たりのいずれにおいても最も高く、以下、丘陵地区、山村地区の順であるが、貧困地区では平原地区のおよそ半分のレベルとなっている。牧民地区は人口が少ないので一人当たり動力は大きなものとなっているが、単位面積当たりでは最も少ない。牧民地区においても集落居住周辺において耕地はあるが、まだまだ畜牧生産が中心であり、動力を使用する耕種部門はごく一部に限られているからである。

機械耕耘面積率について、平原地区では5割を越えているが、貧困地区では2割にも満たない。他の地区はそれら両地区レベルの間に位置する。灌漑面積率についても同様に、平原地区において5割を越えているが貧困地区では低いものとなっている。化学肥料の使用についてはあまり大きな差はみられないが、やはり平原地区で高く貧困地区・民族地区において1割強のレベルとなっている。

農村用電量は、牧民地区より貧困地区の方がさらに少なく、機械化、灌漑、化学肥料の施用など農業技術の近代化については、各地区それぞれの自然条件、社会経済条件を背景とした、各地区の「蓄積」条件の格差がそのまま反映しているとみることができよう。

表 1. 類型地区別農村経済指標 (1988年)

|                     | 丘陵地区    | 山岳地区    | 平原地区    | 貧困地区    | 民族地区    | 牧民地区    |
|---------------------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|
| 1. 郷村人口 (万人)        | 27,415  | 24,936  | 33,886  | 10,990  | 11,531  | 825     |
| 2. 1人当たり耕地面積 (ha/人) | 0.109   | 0.091   | 0.123   | 0.109   | 0.139   | 0.339   |
| 3. 農業機械総動力 (kw/人)   | 285.610 | 198.508 | 383.344 | 156.506 | 235.019 | 460.606 |
| (kw/ha)             | 2,623   | 2,192   | 3,111   | 1,438   | 1,692   | 1,357   |
| 4. 機械耕転面積率 (%)      | 0.363   | 0.205   | 0.578   | 0.180   | 0.283   | 0.439   |
| 5. 有効灌がい面積率 (%)     | 0.392   | 0.360   | 0.556   | 0.288   | 0.395   | 0.221   |
| 6. 化学肥料施用量 (ト/ha)   | 0.214   | 0.188   | 0.255   | 0.135   | 0.117   | 0.046   |
| 7. 農村用电量 (億kw/人)    | 0.007   | 0.005   | 0.012   | 0.003   | 0.004   | 0.005   |
| 8. 農作物総播種面積 (ha/人)  | 0.163   | 0.142   | 0.187   | 0.154   | 0.176   | 0.314   |
| (対耕地面積指数)           | 1.493   | 1.566   | 1.516   | 1.417   | 1.268   | 0.925   |
| 9. 糧食播種比率 (ha/人)    | 0.127   | 0.110   | 0.138   | 0.122   | 0.135   | 0.241   |
| (播種面積に占める指数)        | 0.783   | 0.779   | 0.738   | 0.792   | 0.766   | 0.768   |
| 10. 糧食生産性 (ト/人)     | 0.469   | 0.342   | 0.546   | 0.312   | 0.357   | 0.528   |
| (ト/ha 播種面積)         | 3.683   | 3.099   | 3.962   | 2.552   | 2.646   | 2.191   |
| 11. 綿花生産性 (ト/ha 〃)  | 0.656   | 0.538   | 0.772   | 0.556   | 0.739   | —       |
| 12. 農村社会総生産額 (元/人)  | 1,358   | 959     | 1,961   | 664     | 807     | 1,321   |
| 13. 農業総生産額 (元/人)    | 692     | 582     | 824     | 458     | 617     | 1,103   |
| (元/ha 耕地面積)         | 6,355   | 6,430   | 6,685   | 4,206   | 4,444   | 3,250   |
| 14. 農業副産品買上額 (元/人)  | 266     | 188     | 333     | 139     | 21      | 400     |

(資料) 中国統計出版社「中国分県農村経済統計概要1988年」

表 2. 類型地区別農村経済指標 (1992年)

|                     | 丘陵地区 | 山岳地区   | 平原地区   | 貧困地区   | 民族地区   | 牧民地区  |
|---------------------|------|--------|--------|--------|--------|-------|
| 1. 郷村人口 (万人)        | —    | 28,313 | 36,124 | 19,073 | 12,536 | 853   |
| 2. 1人当たり耕地面積 (ha/人) | —    | 0.104  | 0.116  | 0.115  | 0.134  | 0.345 |
| 3. 農業機械総動力 (kw/人)   | —    | 310    | 431    | 187    | 284    | 553   |
| (kw/ha)             | —    | 2,972  | 3,716  | 1,622  | 2,119  | 1,606 |
| 4. 機械耕転面積率 (%)      | —    | 0.479  | 0.710  | 0.335  | 0.415  | 0.623 |
| 5. 有効灌がい面積率 (%)     | —    | 0.431  | 0.602  | 0.299  | 0.414  | 0.269 |
| 6. 化学肥料施用量 (ト/ha)   | —    | 0.293  | 0.368  | 0.180  | 0.178  | 0.071 |
| 7. 農村用电量 (億kw/人)    | —    | 0.010  | 0.018  | 0.005  | 0.006  | 0.007 |
| 8. 農作物総播種面積 (ha/人)  | —    | 0.164  | 0.184  | 0.176  | 0.181  | 0.320 |
| (対耕地面積指数)           | —    | 1.571  | 1.585  | 1.528  | 1.351  | 0.930 |
| 9. 糧食播種比率 (ha/人)    | —    | 0.125  | 0.129  | 0.129  | 0.133  | 0.076 |
| (播種面積に占める指数)        | —    | 0.760  | 0.700  | 0.732  | 0.732  | 0.238 |
| 10. 糧食生産性 (ト/人)     | —    | 0.511  | 0.589  | 0.366  | 0.440  | 0.070 |
| (ト/ha 播種面積)         | —    | 4.104  | 4.580  | 2.835  | 3.313  | 0.923 |
| 11. 綿花生産性 (ト/ha 〃)  | —    | 0.757  | 0.636  | 0.590  | 0.991  | 0.686 |
| 12. 農村社会総生産額 (元/人)  | —    | 2,678  | 3,813  | 1,135  | 1,397  | 1,926 |
| 13. 農業総生産額 (元/人)    | —    | 1,010  | 1,153  | 688    | 952    | 1,550 |
| (元/ha 耕地面積)         | —    | 9,688  | 9,943  | 5,958  | 7,093  | 4,499 |
| 14. 農業副産品買上額 (元/人)  | —    | 365    | 442    | 187    | 356    | 459   |

(資料) 中国統計出版社「中国農村統計年鑑1993」

### (3) 農作物播種面積・糧食播種比率

一人当たり播種面積は、牧民地区を除いて、平原地区と民族地区において相対的に大きなものとなっているが、播種面積の耕地面積に対する指数は、山村地区、平原地区、丘陵地区の順に大きく、耕地利用度の高いことが窺える。牧民地区では反対に相対的に低位であるといえる。そのような播種面積の中で糧食が占める割合については、若干の差はあるがおしなべて7割7分程度となっており、主食の確保・自給体制が堅持されていることが分かる。

その糧食生産の生産性は、平原地区、丘陵地区、山村地区、民族地区、貧困地区、牧民地区の順に高く、貧困地区は地勢条件とともに生産力発揮条件について低位にあるといえる。一人当たり糧食量も貧困地帯が最も低位である。綿花の単位面積当たり生産性は、平原地区に次いで民族地区が高く、相対的に乾燥地帯に位置する自然条件を反映しているといえる。

### (4) 農業総生産・農村社会総生産

ha当たり農業総生産額は、平原地区、山村地区、丘陵地区では6千元以上となっているが、民族地区、貧困地区では4千元、牧民地区で3千元に留まっており、地域的な生産力条件を反映するものとなっている。さらに一人当たり農業総生産額についてみると、人口規模によって平原地区で8百元、丘陵地区で7百元、民族地区と山村地区で6百元、貧困地区では4百6十元、またきわめて人口の少ない牧民地区で1千1百元と大きな格差が示された。

郷鎮企業などを含めた農村社会総生産額を一人当たりでみると、平原地区の2千元弱を最高として、丘陵地区、牧民地区が1千3百元、山村地区1千元弱、民族地区8百元、そして貧困地区が6百6十元であった。平原地区あるいは丘陵地区では農業部門以上に非農業部門における生産額を産出しており、平原地区は貧困地区の3倍の社会総生産額となっている。すなわち貧困地区は農業部門においても非農業部門においても相対的に生産力発揮条件が劣位であることが窺えよう。

## 3. 農業構造の年次間比較

ここでは88年と92年における農業構造の2時点比較を試みるが、特定類型に含まれる県の数に若干の移動があるため、とくに丘陵地区については2時点比較は困難であり、参考とするにとどめる。88年にくらべ92年の人口は、山村地区で3千万人、平原地区で2千2百万人、民族地区で1千万人、牧民地区で25万人の増加がみられ、とくに貧困地区では8千万人以上の増加となっている。このような増加の内容は、上述のように類型間に含まれる県の移動によるものと、とくに平原地区における

都市への流出によるものと、さらに自然増加によるものとが含まれるが、都市では人口増加抑止体制が厳しいと思われるので後二者によるところが大きいと考えられる。

#### (1)機械化・灌漑・化学肥料

単位面積当たり農業機械総動力、機械耕転面積率は、総じてすべての地区において伸長してきているが、とくに山村地区、平原地区、民族地区の順にその伸長率が高く、貧困地区においても伸びてはいるがその進捗は遅いようである。灌漑面積率についても平原地区では既に6割、山村地区、民族地区でも4割以上となっているが、貧困地区においては3割弱と88年当時とあまり変化がみられない。

#### (2)農作物播種面積・糧食播種比率

一人当たり農作物播種面積については、全体的に若干の増加が認められるが、平原地区では反対に若干の減少傾向がみられる。耕地面積に占める農作物播種面積についても同様の傾向がみられるが、貧困地区においては他に比べいくぶん高く播種率が上昇している。一人当たり糧食播種量は全体的に頭打ち傾向がみられ、総播種面積に占める糧食播種の指数はすべての地区において若干の減少傾向が示されている。若干ではあるが、主食以外の換金作物への転換が始まってきていることが示唆される。

糧食の生産性は、一人当たり生産量および単位面積当たりいずれについても増加しており、大幅な生産力の飛躍とはいえないが、生産性が向上したといえる。しかし綿花の生産性は、民族地区、山村地区での生産性向上が示されたが、平原地区では生産性は減少しており、変動の地域格差が示されている。

#### (3)農業総生産・農村社会総生産

耕地面積当たり農業総生産額は全体的に5割り前後の伸びを示している。また一人当たり農業総生産額についても全地区での伸びを示したが、とくに山村地区で7割の増加があり、平原地区、牧民地区、あるいは民族地区とならんで一人当たり1千元前後の額が得られている。貧困地区においても5割の増があったが7百元弱に留まった。郷鎮企業も含めた一人当たり農村社会総生産額は、山村地区でおよそ2.8倍の2千7百元、平原地区で1.9倍の3千8百元、牧民地区で1.5倍の1千9百元、民族地区で1.7倍の1千4百元、そして貧困地区では1.7倍の1千1百元となった。

88年において平原地区では、貧困地区の2.9倍の一人当たり農村社会生産額をえていたが、92年での比率は3.4倍となっており格差拡大といえる状況を示している。

#### 4. おわりに ー格差構造への認識ー

92年に貧困地区と類型化された地域の郷村人口は増加していた。前述したように、貧困地区は、少数民族地域、自然条件のきわめて厳しい老革命根拠地および辺境地域にとくに集中的に存在している。人口の増加は、これも前述したように3つの内容を含むが、そのうちとくに少数民族地域においては人口増加抑止対策における統制をとり難い側面をもっている。漢民族に対しては「一人っ子」政策がとくに都市住民においては浸透しているようであるが、少数民族については、民族によってその数が異なるようであるが、複数の子供をもつことを許しているためであり、またしかし少数民族は決められた数についてもなかなか遵守しないからである。

また辺境の自然条件は乾燥・荒漠草原・沙漠地帯を含み、土地条件がきわめて劣悪の場合が多い。仮に資本条件や財政条件が緩和され、農業への投資が可能になったとしても、耕種部門の資本集約化が自然条件との関連でみるとそのまま成果をもたらすとは限らず、むしろ砂漠化を招き荒廃する恐れもあるのである。したがって、単純に資本投下さえすれば農業生産の発達が達成されると想定することにも躊躇されるのである。周到に革新技術が開発され周到に導入されなければならない。

広大な国土においては、地域ごとに過剰と不足が同居しているとみなければならず、それらを調整するために縦横につながる交通網が基本的社会基盤として不可欠のものとなっている。92年データは、農業生産以外に郷鎮企業の振興程度が農村社会総生産額の水準に大きな影響を与えていることをより明瞭に示している。したがって食糧の過剰・不足の地域間調整ばかりか、郷鎮企業振興のためにも交通網が重要な社会基盤として欠くことができないのである。

それぞれの類型地区においては、若干ではあるが、糧食以外の商品作目への転換が図られていることが示唆された。しかし92年においても、牧民地区を除いて、およそ7割以上の糧食播種比率となっている。これも十分な調整が困難であることに由来する、地区内自給体制の堅持となっていることを反映するものといえよう。

80年代後半における「貧困」の定義は、前述のように400元（人・年当たり）以下、の純収入かあるいは食糧保有量400kg（人・年）以下であった。88年の貧困地区における平均農業総生産額（人・年）は458元、平均農村社会総生産額は664元、一人当たり糧食生産量は312kgであった。また92年の貧困地区においては、農業総生産額で688元、農村社会総生産額で1千1百元と上昇しているが、糧食生産量は366kgとほとんど伸びてはいない。絶対額では生産額は増加しているが、きわめて高いインフレ上昇率を考慮すれば、年間一人当たり1千元の生産額も、むしろ88年

代後半の400元に匹敵するどころか、それ以下の評価水準ではないかと懸念される。

#### 引用・参考論文

- [1] 黒河 功, 内陸貧困農村の地帯構造, 日中比較による農村の貧困状況からの脱却に関する共同調査研究, 平成4年度科学研究費補助金(国際学術研究・共同研究)研究成果報告書(七戸長生代表), 1994, 5-17.
- [2] 黒河 功, 中国における「貧困農村」の地帯構造, 農業経営研究第20号, 1994, 101-112.
- [3] 国家統計局農村社会経済統計司編, 中国農村統計年鑑1993, 中国統計出版社, 1993.
- [4] 国家統計局農村社会経済調査総隊編, 中国分県農村経済統計概要1991, 中国統計出版社, 1991.
- [5] 三菱総合研究所編, 中国情報ハンドブック1991年版, 蒼蒼社, 1991.
- [6] 平田幹郎著, 現代中国データブック, 古今書院, 1990.
- [7] 渡辺利夫, 社会主義市場経済の中国, 講談社現代新書, 1994.